

大阪・大坂城下町跡

1 所在地

一 大阪市中心部平野町一丁目、二 大阪市中心部道修町一丁目、三 大阪市中心部伏見町二丁目

2 調査期間

一一九九年(平三)一〇月～一九九二年四月、
二一九九二年一月～五月、三一九九二年四月～

七月

3 発掘機関

勸大阪市文化財協会

4 調査担当者

一 松尾信裕・積山 洋・清水 和、二 伊藤 純、
三 積山 洋・豆谷浩之

5 遺跡の種類

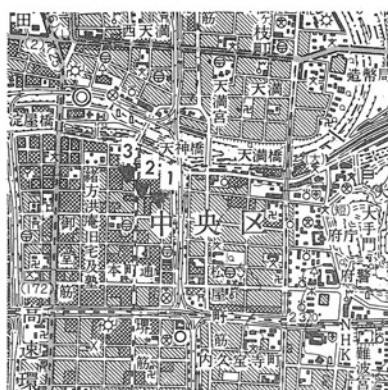
集落・近世城下町跡

6 遺跡の年代

～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪の船場地域は、慶長三年(一五九八)の大坂城三の丸建設に伴い新たに開発された城下町である。それ以降、大坂の商業活動の中



(大阪東北部)

心地として繁栄している。これまでの調査成果では、城下町開発以前から、この地域には人々が生活していたことが明らかになっている。古い遺構は弥生時代に遡り、その後、奈良・鎌倉・室町と各時代の遺構が確認されている。今回木簡が出土した各調査地は、比較的早い段階から開発が進んでいたと考えられる船場の北部に位置している。

一 OJ九一―二次調査

調査地は東横堀川と堺筋のほぼ中間、平野町通りと道修町通りにはさまれた地点である。中世から江戸時代までの遺構・遺物が検出されており、城下町開発以前の遺構には井戸や大溝がある。この大溝は調査地を南北に縦断し、この調査地の北の調査地点でも検出されている。大溝の埋土は大きく二層に分かれ、下層が水成粘土で、上層が人為的な埋土である。下層から出土する遺物は一四～一五世紀代の瓦質土器が多く、この頃に掘削されたと考えられる。上層から出土する遺物には一六世紀末の遺物があり、さらに、人為的な埋土であることから、城下町開発の際の整地によって埋め立てられたと考えている。ここに報告する木簡(1)(2)は、この大溝の下層埋土上部から出土したものである。また(3)(4)は、大坂の陣の後に形成された町屋敷の奥手に作られた廃棄土坑から出土したものである。一七世紀前半の遺物が相伴している。

二 OJ九一―一次調査

年代	出土位置	点数	主な内容
豊臣氏大坂城前期	土壇 盛土層	1	布百四拾端／(伊)勢太神宮 (1)
		2	あかむろ
	小計	3	
豊臣氏大坂城後期	土壇①	2	さば (2)
	土壇②	2	(判読不能)
	土壇③	5	あじ、さば、小たい
	土壇④	22	腰、鮑、はも、さば (3)(4)
	盛土層	27	さば、とびうお、かしら、むろ (5)
	小計	58	
徳川氏大坂城期	廃棄土壇	151	大さかてんま丁、かます、うるめ、あじ、いさき、しまあじ、さば、いとより、ふし、かしら、むろ、たい、ひたい、えそ、はも (6)~(10)
	井戸①	1	(判読不能、板状)
	井戸②	1	むろ
	小計	153	
	計	214	

表1 OJ92-1次調査 出土木簡一覧

(1)~(10)は写真・釈文に対応)

調査地は、道修町通りを堺筋から東に入った地点で、一の調査地の西約一〇〇mの位置にあたる。木簡は、大坂の陣の焼土層を切る廃棄土坑から出土した。共伴している陶磁器から、一七世紀前半頃に廃棄されたものと考えられる。出土点数は、合計七二点である。

三 OJ九二—一次調査

調査地は伏見町通りを堺筋から西に入った地点である。本調査地での出土木簡は合計二一四点。時代別内訳は、豊臣氏大坂城前期(大坂城三の丸築城(慶長三年)以前)三点、豊臣氏大坂城後期(大坂の陣(慶長一九・二〇年)以前)五八点、徳川氏大坂城初期(大坂の陣以

後)一五三点である(表二)。

(一) 豊臣氏大坂城前期

一六世紀後半の盛土層から木簡二点が出土した。またこの盛土層上面から掘込まれた土坑からは、(1)が出土している。同じ土坑から鬼瓦を含む多量の瓦が出土しており、瓦葺建物に伴う遺構と考えられる。

(二) 豊臣氏大坂城後期

大坂の陣の焼土層直下の遺構面で、東西に軒を連ねる数軒の礎石建物が検出された。(2)~(5)は、これらの屋敷地奥手の土坑および盛土から出土している。出土位置の分布状況からみて、特定の屋敷地からまとまって出土していることが考えられる。

(三) 徳川氏大坂城初期

木簡(6)~(10)はいずれも、大坂の陣の焼土層直上の盛土層上面から掘込まれた廃棄土坑から出土したものである。陶磁器類の組成から大坂の陣後ごく早い段階の遺構と考えられる。この土坑から、削屑を含む合計一五一点の木簡が出土している。共伴する遺物には、木簡以外の木製品のほか、魚類の骨や鱗、貝殻などがある。また、この土坑以外に、一七世紀代の井戸二箇所から木簡が各一点ずつ出土している。

8 木簡の釈文・内容

OJ九二—一次、九二—一次調査出土木簡については、出土点

数が多数であるため、代表的な木簡の釈文を掲げることにする。

一 O J 91-1 二次調査

- (1) ・ ×本の内 経右衛門

・ 二本の内

(105) × 17 × 5 081

- (2) 「いせき」

122 × 27 × 3 032

- (3) ・ 「十石の内二郎」
〔総力〕
「右衛門」

・ 「」

187 × 23 × 4 032

(1) (3)は形態からいずれも荷札木簡と推定される。また、(4) (面参照)は薄板に絵を描いた後、へら状に加工したものである。このほか「」に似た墨書のある角蓋板(308 × 236 × 7)が出土している。

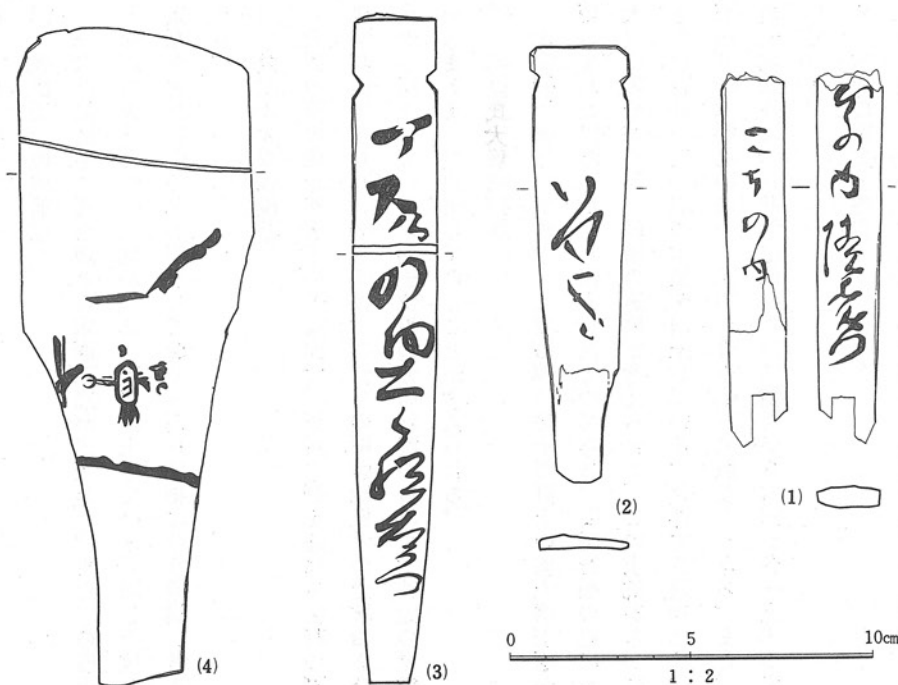
二 O J 91-1 一次調査

- (1) (屋号) 「中」 百五十入 四郎左衛門 (135) × 18 × 4 033

- (2) 「」 五百入 (142) × 18 × 4 033

- (3) ・ 「五郎右衛門殿 可兵衛」

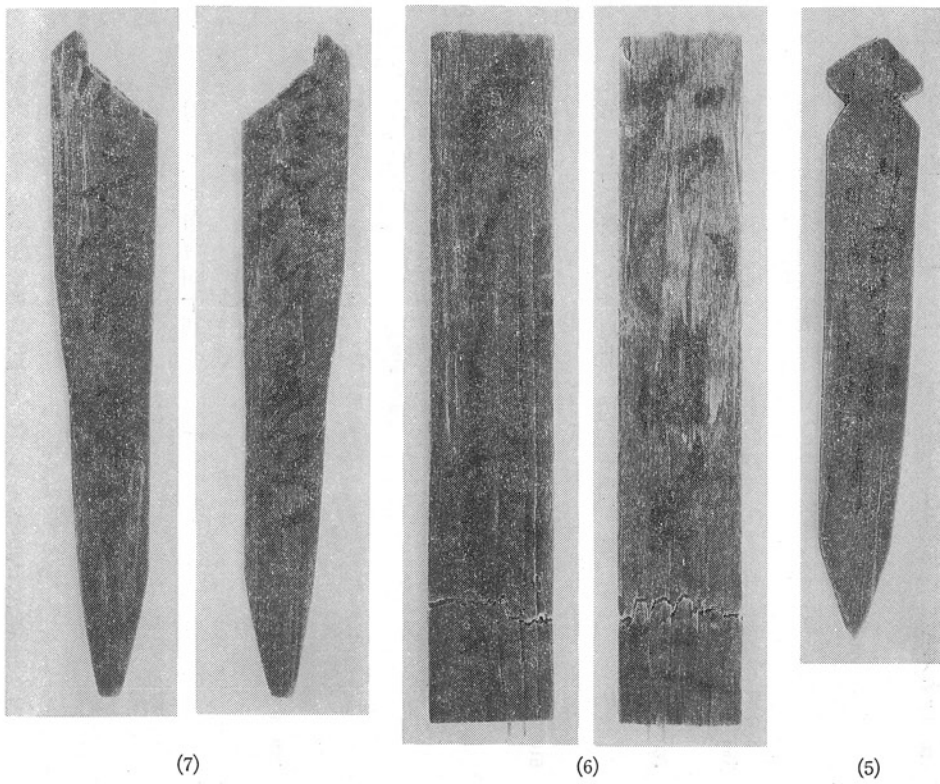
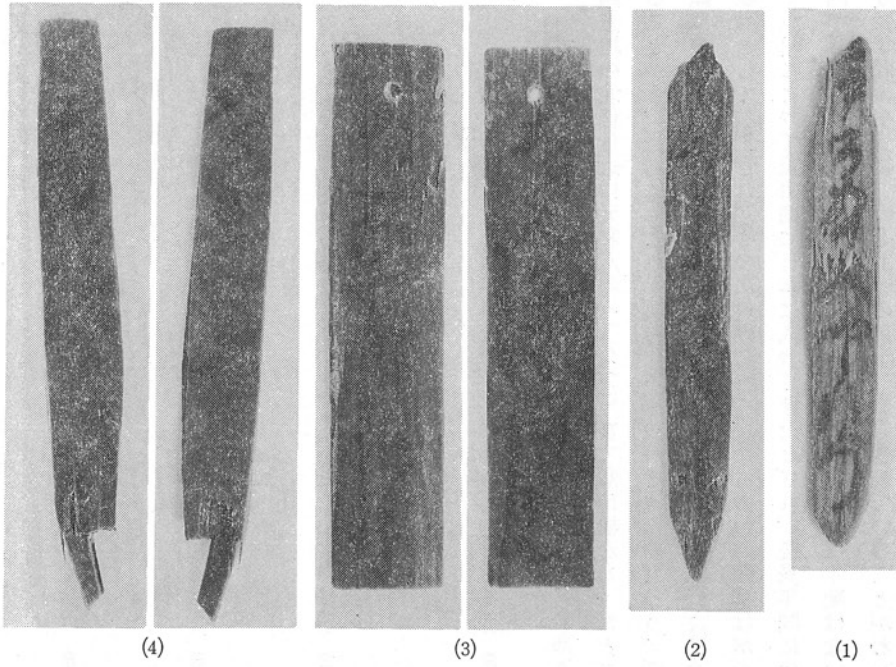
・ 「五郎右衛門殿 可兵衛」 144 × 29 × 3 011



O J 91-2 次調査

1992年出土の木簡

○J九一―二次調査出土木簡



(4) ・「大さは百入」

・「多右衛門」

157×20×3 051

(5) ・「竹田」

・「竹田」

161×26×4 033

(6) ・「たい」

・「たい」

185×33×5 011

(7) ・「正味七拾斤 吉左衛門」

・「正味七拾斤 吉左衛門」

(177)×30×2 059

いずれも荷札木簡である。(4)(6)には「大さは」「たい」とあり、調査地の北側付近に元和八年(一六二二)まで魚市場があったとされることから、当地にもこれと関連する施設があったのだろう。(7)は煙草の荷札である。「正味」とあることから、加工前の葉ではなく、製品として加工されたものに付けられていたものか。煙草はポルトガル船によって豊臣期に日本に入ってきたとされ、慶長年間には国内でも栽培が始まっていたようである。この木簡には年紀はないが、慶長年間の少し後、一七世紀の前半に廃棄されていることがわかり、急速に広まっていった喫煙の風習の背景にある、商品としての煙草

の流通の一端を知ることのできる資料である。

三〇J九二―一次調査

豊臣氏大坂城前期土坑

(1) ・「布百四十端」

・「伊勢太神宮」

(198)×44×9 032

豊臣氏大坂城後期土坑

(2) ・「さ」

・「さ」

(256)×61×4 019

(3) ・「鮑から付四十」

・「鮑から付四十」

172×17×5 032

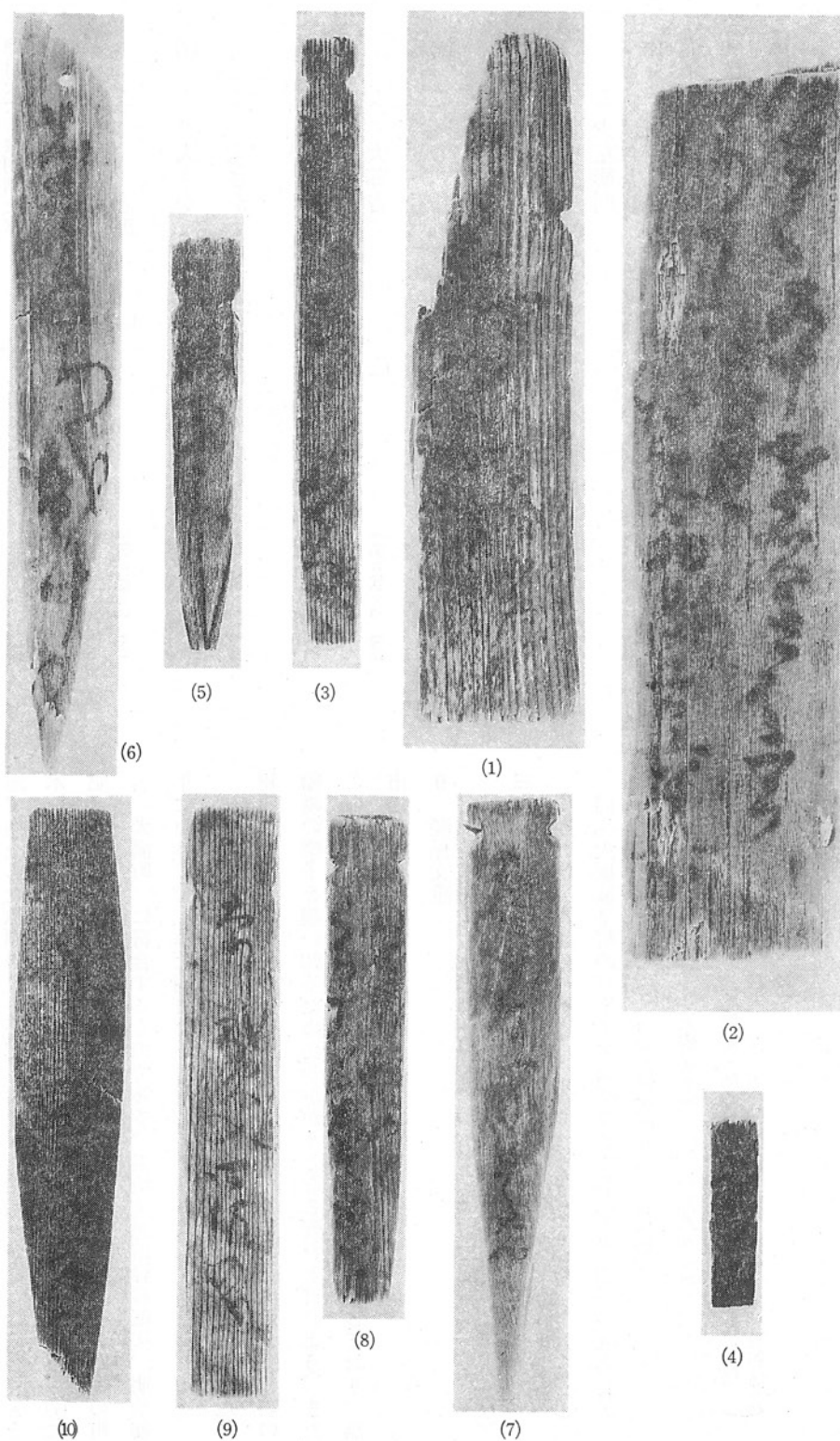
(4) ・「慶」

豊臣氏大坂城後期盛土層

(5) ・「鯖百廿入」

・「鯖百廿入」

114×18×4 033



徳川氏大坂城初期土坑

- (6) ・「○志まあち式十入」
 ・「○ 志郎」
 216×23×3 061
- (7) ・「＜大さかてんま丁 五郎右衛門尉」
 ・「＜大さかてんま丁 五郎右衛門尉」
 176×23×7 083
- (8) ・「＜いとより拾五
 くち十をふるそ五つ」
 ・「＜太郎吉」
 146×23×7 082
- (9) ・「＜大ふし式束入 四佰入内」
 ・「＜惣右衛門殿 久右衛門」
 169×23×6 082
- (10) ・「ふし一兵衛二〇六郎×
 ・「少左衛門
 八月五日」
 (170)×23×3 061

紹介した木簡をはじめ、本調査地で出土した木簡の大部分が魚介名を記した荷札木簡である。堺筋をはさんだ現在の伏見町周辺は、豊臣時代（天正年間とする説と慶長二年とする説がある）から元和八年（一六二二）までの間魚市場が存在したと言われており、一九八六、七年度の調査でも魚市場関係の木簡が大量に出土している。本調査

地で出土した魚類の骨の同定を行なった結果、かなりの割合で骨と木簡に記された魚名とが一致することもわかっている。また、(7)に記された「大さかてんま丁」の地名は、魚市場が所在した時期の町名「天満町」に符合するものである。当地は魚市場移転後、明治初年に至るまで「本天満町」と呼ばれるようになる。

(1)の「(伊)勢太神宮」と記された木簡は、城下町整備以前の瓦葺建物に伴うと考えられる土坑から出土していることから、開発前の船場の様子を窺い知るための手がかりとなる資料と言えよう。また、この時期の盛土から魚名を記した荷札木簡が一点出土しており、魚市場の移転時期との関連で注目される。

9 関係文献

松尾信裕 「道修谷」から道修町へ」（働大阪市文化財協会『葦火』三九 一九九二年）

伊藤 純 「大坂の陣のころのうつわ」（同『葦火』四〇 一九九二年）

同 「大坂城下町のベネチアングラス」（同『葦火』四二 一九九三年）

中尾芳治 「大坂城跡」（『木簡研究』九 一九八七年）

森 毅 「大坂城跡」（『木簡研究』一〇 一九八八年）

（一）松尾信裕・積山 洋・清水 和、二伊藤 純、
 （三）積山 洋・豆谷浩之、釈文 鳥居信子・豆谷浩之